これからの保育所と保育所設計における視点

宮城学院女子大学　教授　厳　爽

「子育て」は人類史上もっともプリミティブな行為であるが、最近社会的状況の変化によってそのあり方が大きく変わっている。家族と地域共同体が担ってきた「子育て環境」が、極めて個別的な「家庭環境」となり、様々な人と関わり合いながら成長していく集団生活のダイナミズムから、特定の大人と向き合う固定的関係の中での教育対象へと、養育を成立させるバックグラウンドが大きく変化している。

かつての集団生活の中で獲得してきた人とのコミュニケーションの仕方やその生活経験を補完し、自立して生きることができるように幼児を育成することが「保育」の課題であるともいえる。すなわち保育とは「食べる、寝る、遊ぶ」という幼児の生活を根底にしながら、こどもの生命力を最大限に活かすための行為であり、保育所はそのための「場」なのである。

平成元年の幼稚園教育要領は、従来の保育者中心の保育から、子どもの発達援助という観点に基づいた保育観への転換を図り、「環境による教育」という考え方を前面に出している。つまり、子どもが自ら主体的に関わろうとする環境を構築することを保育者や保育空間の中心的な役割と位置づけることで、成長・発達しようとする子どもを間接的に支援する立場に立ち返ろうとするものである。今後の保育施設の方向としては、「生活」の重視と「環境」による間接的な教育・保育という 2 点に比重が置かれるといえよう。

ある建築家も言っているが、こどもの限りなくある可能性を最大限に発揮させる保育環境のあるべき姿は自由な広がりをもった原っぱのような環境であるのかもしれない。

保育環境のあり方に関しては、建築計画分野で多くの研究知見が蓄積されてきた。今回のプロポーザルの応募に当たって、是非とも一読いただきたい論文を以下に記した。いずれも日本建築学会のホームページから閲覧・ダウンロードが可能となっている。

参考論文：

1.「保育所における０歳児の食事・午睡・あそびの行為と面積について」近藤ふみ，定行まり子
日本建築学会計画系論文集　NO.653　P.1647　2010 年 7 月
2.「保育所における園児の居場所の展開と活動場面の抽出方法に関する考察～保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究（その１）～」山田あすか，上野　淳，登張絵夢
日本建築学会計画系論文集　NO.580　P.57　2004 年 6 月
3.「園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察～園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究　その１～」佐藤将之，高橋鷹志
日本建築学会計画系論文集　NO.562　P.151　2002 年 12 月